

曖昧さへの態度と自己志向的完全主義の関連¹⁾

西村 佐彩子

Attitudes towards Ambiguity and Self-oriented Perfectionism

Sayako NISHIMURA

Accepted June 24, 2013

抄録: 本研究の目的は、曖昧さへの態度と自己志向的完全主義の関連を検討し、曖昧さへの態度の各側面のもつ特徴を明らかにすることである。大学生 184 名を対象に、曖昧さへの態度、自己志向的完全主義、Big Five を測定する尺度からなる質問紙調査を行った。その結果、曖昧さの享受と適応的な完全主義、曖昧さへの不安と不適応的な完全主義との関連が示された。また、曖昧さの享受は Big Five の開放性と外向性との関連がみられ、より適応につながる態度であることが示唆された。

索引語: 曖昧さへの態度、自己志向的完全主義、Big Five

Abstract : This study examined the relationship between attitudes towards ambiguity and self-oriented perfectionism, and the characteristics of different aspects of attitudes towards ambiguity. A questionnaire, which included a scale of attitudes toward ambiguity, self-oriented perfectionism, and Big Five, was given to 184 undergraduates. The results showed that enjoyment of ambiguity had a correlation with positive perfectionism, and anxiety concerning ambiguity had a correlation with negative perfectionism. In addition, Openness and Extraversion (from Big Five) were related to enjoyment of ambiguity, and it was suggested that this attitude is adaptive.

Key Words : attitudes towards ambiguity, self-oriented perfectionism, Big Five

1. 問題と目的

曖昧さは、十分な手がかりがないために適切に構造化やカテゴリー化をすることができないという特徴をもっており、新奇性（熟知した手がかりが全くない新しい状況）、複雑性（考慮すべき手がかりが多すぎる複雑な状況）、不可解性（個々の手がかりが異なる事態を指している矛盾した状況）に分類される（Budner, 1962）。日常において知覚された曖昧さに対する個人の反応傾向に関する研究は、曖昧さへの否定的態度である“曖昧性耐性の低さ”²⁾ という概念を中心に論じられることが多かった（e.g.

Frenkel-Brunswik, 1949 ; 友野・橋本, 2005a)。曖昧性耐性の低さは“曖昧な状況を脅威の源として知覚する傾向”(Budner, 1962)であり、抑うつや不安などの心理的不適応との関連が示されている(e.g. 友野・橋本, 2005b ; 吉川, 1980)。さらに臨床場面においても、うつ病、強迫神経症、不登校などにみられる特徴として、曖昧性耐性の低さが示唆されている(e.g. 衛藤, 1991 ; 北山, 1988 ; 西村, 2006)。

これに対して西村(2007)は、曖昧さへの態度を“曖昧な刺激の処理において生じる、認知的、情緒的反応パターン”にとらえなおし、曖昧さへの否定的態度のみならず、曖昧さへの肯定的態度も含む、多次元的な態度から構成されることを明らかにした。曖昧さへの否定的態度は、情緒的な否定的態度である“曖昧さへの不安”と、認知的な否定的態度である“曖昧さの統制”“曖昧さの排除”から構成される。“曖昧さへの不安”は、従来の曖昧性耐性の低さ(増田, 1998)と関連が強く、曖昧さへの態度の中心的な側面であるといえる。曖昧さへの肯定的態度は“曖昧さの享受”と“曖昧さの受容”から構成される。西村(2007)は、曖昧さへの態度の各側面では心理的適応要因との関連の仕方が異なることを示し、曖昧さへの態度を耐性という一次元ではなく、多次元的にとらえていくことの有用性を指摘している。

ところで、曖昧さへの態度以外にも曖昧さと関連する個人特性は存在すると考えられる。たとえば、不決断傾向と強迫症状、完全主義の関連について検討を行った研究があるが(Frost & Shows, 1993 ; 杉浦・杉浦・丹野, 2007)、これらはいずれも曖昧さの取り扱い方と関連が深い個人特性であると思われる。曖昧さへの態度の近接概念といえるだろう。これらの近接概念と曖昧さへの態度の関連および相違点について検討することで、曖昧さへの態度の各側面のもつ特徴がより明らかになると思われる。曖昧さへの態度と強迫傾向の関連について検討した西村(2007)は、“曖昧さへの不安”と“曖昧さの統制”との間に正の関連、“曖昧さの受容”との間に負の関連を示している。そこで、本研究では完全主義傾向を取り上げて、曖昧さへの態度との関連について検討を行う。

完全主義とは、過度に完全性を求める傾向である。完全主義は強迫神経症、抑うつ、摂食障害などの広範な精神疾患や精神的健康の悪化との関連が報告される性格傾向であるが(大谷, 2004)、完全主義のなかでも完全性を自己に求める自己志向的完全主義には、心身の健康と関連する側面と不健康と関連する側面が存在することが指摘されている(桜井・大谷, 1997)。桜井・大谷(1997)は Frost, Marten, Lahart, & Rosenblate (1990)を参考に自己志向的完全主義を多次元的にとらえなおし、抑うつなどに陥りにくい適応的な側面(自分に高い目標を課する傾向)と、抑うつなどの不適応に陥りやすい側面(失敗を過度に気にする傾向、自分の行動に漠然とした疑いをもつ傾向)があり、それらすべての側面と関連している完全でありたいという欲求のみをとりあげた場合には、適応・不適応との関連はほとんどみられないことを示した。

完全主義傾向が強い人は、曖昧さを知覚したときにもその曖昧な部分に対して何らかの形で完全性を求めようとすると考えられる。曖昧さに対してどのような態度をもっているかによって、自己に対して完全でありたい欲求が、適応的な完全主義となるか、あるいは不適応的な完全主義として発現するかが異なってくる可能性があるだろう。

曖昧さへの肯定的態度には“曖昧さの享受”と“曖昧さの受容”の二側面が存在するが、完全主義との関連の仕方は異なると思われる。“曖昧さの受容”は曖昧さをそのまま認めて受け入れる態度であり、強迫傾向とも低い負の相関を示している(西村, 2007)。これは完全主義と相反する態度であると考えられ、完全主義の基本的特徴である“完全でありたいという欲求”と負の相関が予測される。一方で“曖昧さの享受”は、曖昧さを魅力的なものと評価し関与していくことに楽しみを見出す態度で

ある。日常において曖昧さが存在しない状況はほとんど存在しないため、完全主義が適応的に働くためには、曖昧さに肯定的・積極的に関与していけるかどうかに関わってくると考えられる。よって、自己志向的完全主義のなかでも適応的な側面と関連することが予測される。

曖昧さへの否定的態度のなかでも“曖昧さへの不安”は心理的不適応との関連が強い態度である（西村，2007）。曖昧さに不安や情緒的混乱などの脅威を感じやすいと、完全主義傾向がより負の方向に働くことが考えられる。“ミス（失敗）を過度に気にする傾向”と“自分の行動に漠然とした疑いをもつ傾向”は不適応傾向との関連が指摘されており（大谷，2004；齋藤・今野・沢崎，2009；桜井・大谷，1997），“曖昧さへの不安”との関連が予測される。

また，“曖昧さの統制”や“曖昧さの排除”における、曖昧さを知的に把握・対処しようとする、あるいは白黒つけようとすることは、完全性を求めようとする傾向と通じる部分があると考えられる。これらの認知的な曖昧さへの否定的態度は“曖昧さへの不安”と比べて不適応との関連も明確ではなく（西村，2007），完全主義が適応・不適応のどちらに転がる可能性も考えられる。そのため、自己志向的完全主義全体との関連が予測される。

以上より、曖昧さへの態度と自己志向的完全主義の関連について、以下の4つの仮説が考えられる。

仮説1 曖昧さへの肯定的態度である“曖昧さの受容”は、“完全でありたいという欲求”と負の関連が予測される。

仮説2 曖昧さへの肯定的態度である“曖昧さの享受”は、適応的な完全主義である“自分に高い目標を課する傾向”と正の関連が予測される。

仮説3 曖昧さへの情緒的な否定的態度である“曖昧さの不安”は、不適応的な完全主義である“ミス（失敗）を過度に気にする傾向”と“自分の行動に漠然とした疑いをもつ傾向”と正の関連が予測される。

仮説4 曖昧さへの認知的な否定的態度である“曖昧さの統制”と“曖昧さの排除”は、適応・不適応に限らない完全主義全体と正の関連が予測される。

さらに、曖昧さへの態度と自己志向的完全主義の関連を示したうえで、パーソナリティの基本的特性次元である Big Five との関連についても検討を行う。Big Five の各因子が、曖昧さへの態度と自己志向的完全主義のそれぞれの側面に与えている影響の様相を比較してその相違を検討することを通して、曖昧さへの態度のもつ特徴を明らかにしていくことも試みる。

2. 方法

調査対象者

大学生 184 名（男性 143 名，女性 39 名，無記入 2 名；平均年齢 19.17 歳， $SD=1.18$ ）から回答を得た。

質問紙の構成

(1) 曖昧さへの態度の測定 西村（2007）の作成した“曖昧さへの態度尺度”を用いた。曖昧さへの態度を多次元的に測定する尺度であり，“曖昧さの享受（以下，享受）”7項目，“曖昧さへの不安（以下，不安）”6項目，“曖昧さの受容（以下，受容）”5項目，“曖昧さの統制（以下，統制）”5項目，“曖昧さの排除（以下，排除）”3項目の5因子計26項目からなる。1 全くあてはまらない～6 非常にあてはまるの6件法で回答を求めた。

- (2) 自己志向的完全主義の測定 桜井・大谷 (1997) の作成した“新完全主義尺度”を用いた。“完全でありたいという欲求 (以下, 完全欲求)” “自分に高い目標を課する傾向 (以下, 高目標設定)” “ミス (失敗) を過度に気にする傾向 (以下, 失敗懸念)” “自分の行動に漠然とした疑いをもつ傾向 (以下, 行動疑念)” の 4 因子各 5 項目, 計 20 項目からなる。1 全くあてはまらない～6 非常にあてはまるの 6 件法で回答を求めた。
- (3) Big Five の測定 和田 (1996) の作成した“Big Five 尺度”を用いた。“外向性” “情緒不安定性” “開放性” “誠実性” “調和性” の 5 因子各 12 項目, 計 60 項目からなる。1 全くあてはまらない～7 非常にあてはまるの 7 件法で回答を求めた。

手続き

質問紙への回答は無記名による集団形式で行われた。

3. 結果

各下位尺度の基本統計量

各尺度の下位尺度ごとに、曖昧さへの態度尺度および自己志向的完全主義尺度は“全くあてはまらない”を 1 点“非常にあてはまる”を 6 点, Big Five は“全くあてはまらない”を 1 点“非常にあてはまる”を 7 点とした合計の平均を各下位尺度得点とした。本調査における各下位尺度の平均値と標準偏差および α 係数を Table 1 に示す。

Table 1 各下位尺度の基本統計量

	曖昧さへの態度					自己志向的完全主義					Big Five				
	享受	受容	不安	統制	排除	DP	PS	CM	D	E	N	O	C	A	
平均値	4.38	3.70	4.03	4.37	3.88	3.85	4.06	3.29	4.26	4.34	4.57	4.14	3.61	4.42	
SD	0.74	0.81	0.85	0.69	1.02	1.00	0.94	0.98	0.85	1.08	1.05	0.87	0.78	0.78	
α 係数	.76	.70	.76	.67	.74	.81	.79	.75	.68	.90	.89	.84	.79	.78	

注. DP: 完全欲求, PS: 高目標設定, CM: 失敗懸念, D: 行動疑念
E: 外向性, N: 情緒不安定性, O: 開放性, C: 誠実性, A: 調和性

曖昧さへの態度と自己志向的完全主義の関連

曖昧さへの態度の各下位尺度と自己志向的完全主義の各下位尺度との相関係数を算出した (Table 2)。“享受”は“完全欲求” “高目標設定” “行動疑念” との間に有意な正の相関がみられた。“受容”は“完全欲求” “高目標設定” との間に有意な負の相関がみられた。“不安”は“失敗懸念” “行動疑念” との間に有意な正の相関がみられた。“統制”と“排除”はすべての下位尺度との間に有意な正の相関がみられた。“完全欲求”と負の相関がみられたのは“受容”のみであり、仮説 1 は支持された。

また、完全主義の基本的特徴である“完全欲求”は自己志向的完全主義のどの側面にも関連する性質を有することが指摘されており (桜井・大谷, 1997), 本調査でも“完全欲求”は他の 3 つの自己志向的完全主義との相関が高かった ($r=.49 \sim .68$)。そこで“完全欲求”を制御変数とした偏相関係数を算出した (Table 2)。その結果, “享受”は“高目標設定”との間に有意な正の相関が, “失敗懸念”との間に負の相関がみられた。“不安”は“失敗懸念” “行動疑念” との間に有意な正の相関がみられた。

“統制”は“行動疑念”“高目標設定”との間にのみ有意な正の相関がみられるにとどまった。“受容”と“排除”はいずれの完全主義とも有意な相関はみられなかった。

以上より，“享受”は適応的な完全主義である“高目標設定”と正の相関が，“不安”は不適応的な完全主義である“失敗懸念”と“行動疑念”と正の相関がみられ、仮説 2 と仮説 3 は支持された。しかし，“統制”と“排除”については“完全欲求”との間に正の相関はみられたものの，“完全欲求”を統制した偏相関分析では“統制”と“行動疑念”“高目標設定”との間に一部相関がみられたのみであり，“排除”はいずれの下位尺度とも有意な相関はみられなかった。よって、仮説 4 は支持されなかった。

Table 2 曖昧さへの態度と自己志向的完全主義の相関係数

	完全欲求	高目標設定	失敗懸念	行動疑念
曖昧さの享受	.37***	.51*** (.37***)	.04 (-.21**)	.24** (.07)
曖昧さの受容	-.31***	-.15* (.09)	-.10 (.09)	-.04 (.14)
曖昧さへの不安	.06	.13 (.13)	.33*** (.36***)	.41*** (.44***)
曖昧さの統制	.33***	.34*** (.17*)	.25** (.09)	.43*** (.33***)
曖昧さの排除	.39***	.32*** (.08)	.20** (-.01)	.25** (.07)

注. () は完全欲求を制御変数とした偏相関係数を示す。 * $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

Big Five が曖昧さへの態度に及ぼす影響

曖昧さへの態度の各下位尺度と Big Five の各下位尺度との相関係数を算出した (Table 3)。次に、Big Five の 5 つの因子が曖昧さへの態度の各側面とどのように関連しているのかを検討するため、曖昧さへの態度の下位尺度ごとに、Big Five の 5 つの因子を説明変数、曖昧さへの態度を目的変数とした重回帰分析 (強制投入法) を行った。その結果、すべての下位尺度で決定係数 (R^2) が有意であった。重回帰分析の結果を Table 4 に示す。

“享受”では“開放性”“外向性”が有意な正の影響を示した。“受容”では“誠実性”が有意な負の影響を、“調和性”が正の影響を示した。“不安”では“情緒不安定性”“調和性”が有意な正の影響を、“開放性”が負の影響を示した。“統制”では“情緒不安定性”が有意な正の影響を示した。“排除”では、“外向性”“情緒不安定性”が有意な正の影響を示した。

以上の結果を概括すると、曖昧さへの否定的態度はいずれも“情緒不安定性”と負の関連が示された。また、曖昧さへの肯定的態度は“情緒不安定性”との関連はみられず、それぞれ Big Five の異なる因子からの影響が示された。

Table 3 曖昧さへの態度と Big Five の相関係数

	曖昧さの享受	曖昧さの受容	曖昧さへの不安	曖昧さの統制	曖昧さの排除
外向性	.24**	-.21**	-.28***	.11	.21**
情緒不安定性	-.01	.02	.54***	.22**	.18*
開放性	.46***	-.04	-.28***	.03	.09
誠実性	.10	-.41***	-.10	.00	.07
調和性	.08	-.02	.00	.05	.01

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

Table 4 曖昧さへの態度を目的変数とする重回帰分析結果

	曖昧さの享受	曖昧さの受容	曖昧さへの不安	曖昧さの統制	曖昧さの排除
外向性	.27***	-.15	-.10	.18	.27**
情緒不安定性	.12	-.01	.53***	.29***	.26**
開放性	.38***	.09	-.17*	-.00	.01
誠実性	-.06	-.43***	-.05	-.06	.01
調和性	-.02	.15*	.22**	.10	.00
R^2	.25***	.18***	.35***	.06**	.08**

注. 表中の数値は標準偏回帰係数 β を示す。 * $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

Big Five が自己志向的完全主義に及ぼす影響

自己志向的完全主義の各下位尺度と Big Five の各下位尺度との相関係数を算出した (Table 5)。次に, Big Five の 5 つの因子が自己志向的完全主義の各側面とどのように関連しているのかを検討するため, 自己志向的完全主義の下位尺度ごとに, Big Five の 5 つの因子を説明変数, 自己志向的完全主義を目的変数とした重回帰分析 (強制投入法) を行った。その結果, すべての下位尺度で決定係数 (R^2) が有意であった。重回帰分析の結果を Table 6 に示す。

“完全欲求”では“情緒不安定性”“開放性”“誠実性”が有意な正の影響を示した。“高目標設定”では“開放性”“情緒不安定性”“外向性”が有意な正の影響を示した。“失敗懸念”では“情緒不安定性”が有意な正の影響を, “外向性”が負の影響を示した。“行動疑念”では“情緒不安定性”が有意な正の影響を示した。

以上の結果から, 自己志向的完全主義はすべての側面において“情緒不安定性”との関連が示された。また, 不適応的な完全主義の方が β の値が高く, “失敗懸念”および“行動疑念”と不適応の関連が支持された。“完全欲求”と“高目標設定”は“開放性”など他の因子の影響も同時にみられた。

Table 5 自己志向的完全主義と Big Five の相関係数

	完全欲求	高目標設定	失敗懸念	行動疑念
外向性	.17*	.28***	-.26***	-.09
情緒不安定性	.26***	.18*	.48***	.50***
開放性	.30***	.38***	-.07	.04
誠実性	.29***	.25**	-.03	.09
調和性	-.03	.11	-.20**	-.09

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

Table 6 自己志向的完全主義を目的変数とする重回帰分析結果

	完全欲求	高目標設定	失敗懸念	行動疑念
外向性	.08	.17*	-.18*	-.04
情緒不安定性	.34***	.31***	.44***	.52***
開放性	.30***	.33***	.09	.13
誠実性	.27***	.14	.08	.13
調和性	-.11	.03	-.08	-.02
R^2	.25***	.25***	.24***	.26***

注. 表中の数値は標準偏回帰係数 β を示す。 * $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

4. 考察

本研究は、曖昧さへの態度と自己志向的完全主義との関連について検討し、曖昧さへの態度の各側面の特徴を示すことを目的とした。

完全主義の基本的特徴である“完全欲求”は“不安”以外のすべての曖昧さへの態度と有意な相関がみられ、曖昧さへの態度と完全主義傾向との関連が示された。“完全欲求”は曖昧さへの肯定的態度である“享受”と否定的態度である“統制”“排除”のいずれとも正の相関を示していた。これらの態度は曖昧さに対する評価は肯定・否定と異なるが、曖昧さをそのままにしておくのではなく何らかの形で関与あるいは変容していこうとする側面があり、“完全欲求”との関連に表れたのではないかと考えられる。一方で、曖昧さを変容せずに受け入れる態度である“受容”は、同じ肯定的態度である“享受”とは反対に“完全欲求”と負の相関を示していた。完全性を求めようとするか否かは、曖昧さへの評価ではなく曖昧さへの関与のあり方と関連していることが考えられる。また、曖昧さへの態度のなかでも“不安”は不適応的な態度であり、“不安”のみ“完全欲求”との関連がみられなかったことは、“完全欲求”だけでは適応・不適応との関連はみられない（桜井・大谷，1997）という見解と一致している。曖昧さへの態度の中心的側面と完全主義の基本的特徴の関連がみられなかったことは、曖昧さへの態度と完全主義には関連する側面もあるが異なる性質を有していることを示しているだろう。

次に、曖昧さへの態度の側面ごとにその特徴について、自己志向的完全主義との偏相関係数およびBig Fiveとの重回帰分析の結果から考察する。曖昧さへの肯定的態度でも“曖昧さの享受”と“曖昧さの受容”では異なる特徴がみられた。“曖昧さの享受”は“高目標設定”と正の関連がみられ、仮説を支持している。“高目標設定”は新奇性追求との関連が示されているが（中川・佐藤，2010），新奇性に限らない曖昧さに関与していく態度と関連すると考えられる。また、偏相関分析では“失敗懸念”と負の関連もみられた。完全主義のなかでも“失敗懸念”は不適応に陥る最も大きな原因と考えられ（桜井・大谷，1997），“享受”が不適応を緩和する可能性も示された。Big Fiveとの関連では，“開放性”“外向性”との関連がみられた。“開放性”は“遊戯性”ともいわれ（辻，1991），さまざまな対象を追っていくだけの粘り強さをもつ遊び追求の因子であり（和田，1996），曖昧さに対しても開かれた態度をもつことにつながると考えられる。“外向性”は“排除”とも関連がみられたが，“排除”は曖昧さに白黒をつけたいという明確な態度であり，“外向性”のもつ活動性が異なる方向に働いたものと思われる。本調査では“享受”と関連の強い“高目標設定”も“開放性”“外向性”との関連がみられたが、それに加え“情緒不安定性”とも関連がみられた。³⁾これは“高目標設定”が適応的完全主義であることを支持しない結果である。小堀・丹野（2004）は、高い目標を設定することが必ずしも適応的ではなく、高い目標を設定しているがゆえに緊張してしまったり強迫的な努力を繰り返すことが強迫傾向やネガティブ感情につながることを示唆している。“享受”は“情緒不安定性”との関連もみられず、目標や成果にとらわれすぎることなく自由に曖昧さに関与していけるとと思われる。曖昧さに耐えられないゆえに完全性を求めたり高い目標を課そうとするのではなく、曖昧さへの関与に楽しみを見出す態度をもつことは、完全主義傾向をより適応的な方向につなげていける可能性があるのではないか。“曖昧さの享受”は、不適応を緩和するというよりも、適応をより促進する態度ではないかと考えられる。

一方で“曖昧さの受容”は完全主義の基本的特徴である“完全でありたいという欲求”と唯一負の

相関があり、完全主義を緩和する態度である可能性が示唆されたが、適応的・不適応的完全主義とは関連がみられなかった。また、Big Five との関連でも“受容”と“完全欲求”では各因子からの影響の仕方に異なる部分がみられた。このことは、曖昧さをそのまま受け入れることと完全性を求めることは、一次元にあるのではなく別の性質である可能性を示唆している。“受容”は Big Five の“誠実性”との負の関連が強く、“調和性”とも低い正の関連がみられた。“誠実性”はまじめさや意志力のことであり（和田，1996），今あるものを受容していこうという意志に欠ける側面を表しているかもしれない。“曖昧さの受容”と適応の関連についてはこれまでも一貫した見解が得られておらず、曖昧さに脅威を感じながらも受動的になったり実際の行動がとれない場合には適応的とはいえない可能性があり（西村，2007；吉川，1980），今後も検討の必要があるだろう。

“曖昧さへの不安”は仮説どおり“失敗懸念”“行動疑念”とのみ関連がみられ，“曖昧さへの不安”があると完全主義傾向が不適応的に働きやすくなる可能性が示唆された。また、Big Five との関連では“情緒不安定性”の影響を強く受けており、不適応と関連しやすい態度であることが本研究でも支持された。さらに“調和性”と正の関連，“開放性”と負の関連もみられ、未知なものや不可解なものには関わっていきにくくなる側面を表していることが考えられる。

“曖昧さの統制”は“行動疑念”“高目標設定”との関連がみられた。“行動疑念”は強迫症状と近似の概念であることが指摘されており（小堀・丹野，2004；杉浦他，2007），“統制”が強迫傾向と関連する（西村，2007）ことと一致している。また，“行動疑念”は自分のしたことにやり残しがないかなど自分の行動に関心が向いている（齋藤他，2009）完全主義であり、曖昧さを排除するのではなく把握・対処しようとする“統制”と関連がみられたと考えられる。“高目標設定”については，“統制”は“享受”と同様、曖昧さに関与していく態度であることが関連していると思われる。“統制”が適応と関連する態度であるかどうかについては検討の必要があるだろう。

認知的な否定的態度である“曖昧さの統制”と“曖昧さの排除”は、自己志向的完全主義や Big Five との関連からは、先行研究（西村，2007）と同様に適応との関連は部分的なものにとどまった。完全主義との相関はみられたものの，“完全欲求”を統制した偏相関係数からは明確な結果が得られず、完全主義との関連については検討の余地があるだろう。また、Big Five では“情緒不安定性”との関連がみられたものの、決定係数の値は低く、他の要因との関連についても検討していく必要がある。心理的適応との関連からではなく、認知的変数などの要因との関連について検討していくことで、認知的な曖昧さへの否定的態度の特徴が明らかになる可能性が考えられる。

以上より、曖昧さへの態度を多次的にとらえていく有用性が示された。本研究では曖昧さへの態度の近接概念のなかから自己志向的完全主義を取り上げたが、その他の曖昧さに関する近接領域・概念との関連についても検討を行い、その特徴の相違を整理していく必要があるだろう。

注

- 1) 本論文は、九州大学大学院人間環境学府に提出した博士論文（2007）の研究8の一部（未公開部分）に、データの追加および再分析を行ったうえで加筆修正をしたものである。なお博士論文では、曖昧さへの態度と自己志向的完全主義（94名）および Big Five（83名）との相関係数のみを算出した。この結果については、日本心理学会第71回大会で発表を行った。

- 2) 曖昧さへの非寛容などの邦訳も用いられるが、本論文では曖昧性耐性の低さという訳に統一して使用する。
- 3) 齋藤・沢崎・今野（2009）の研究において示されていた自己志向的完全主義と Big Five の相関係数では、“高目標設定”と有意な相関がみられたのは“開放性”のみであり，“情緒不安定性”との間に相関はみられていない。この研究では 30 項目の Big Five 尺度を使用していることなど尺度による差異も考慮したうえで、検討の必要はあるだろう。

引用文献

- Budner, S. (1962). Intolerance of ambiguity as a personality variable. *Journal of Personality*, **30**, 29-50.
- 衛藤順子（1991）. Ambiguity-Tolerance 概念の有用性について 東北福祉大学研究紀要, **16**, 305-319.
- Frenkel-Brunswik, E. (1949). Intolerance of ambiguity as an emotional and perceptual personality variable. *Journal of personality*, **18**, 108-143.
- Frost, R.O., Marten, P., Lahart, C., & Rosenblate, R. (1990). The dimension of perfectionism. *Cognitive Therapy and Research*, **14**, 449-468.
- Frost, R.O., & Shows, D.L. (1993). The nature and measurement of compulsive indecisiveness. *Behaviour Research and Therapy*, **31**, 683-692.
- 北山修（1988）. 心の消化と排出 創元社
- 小堀修・丹野義彦（2004）. 完全主義の認知を多次元で測定する尺度作成の試み パーソナリティ研究, **13**, 34-43.
- 増田真也（1998）. 曖昧さに対する耐性が心理的ストレスの評価過程に及ぼす影響 茨城大学教育学部紀要（人文・社会科学・芸術）, **47**, 151-163.
- 中川明仁・佐藤豪（2010）. Cloninger の気質 4 次元と自己志向的完全主義の関連 パーソナリティ研究, **19**, 38-45.
- 西村佐彩子（2006）. 曖昧性耐性からみたクライアントの理解とその関わり方 心理臨床学研究, **24**, 221-231.
- 西村佐彩子（2007）. 曖昧さへの態度の多次元構造の検討—曖昧性耐性との比較を通して— パーソナリティ研究, **15**, 183-194.
- 大谷保和（2004）. 自己志向的完全主義の 2 側面と自己評価的抑うつ傾向の関連の検討—統制不可能事態への対処を媒介として— 心理学研究, **75**, 199-206
- 齋藤路子・今野裕之・沢崎達夫（2009）. 自己志向的完全主義の特徴—精神的不健康に関する諸特性との関連から— 対人社会心理学研究, **9**, 91-100.
- 齋藤路子・沢崎達夫・今野裕之（2009）. 自己志向的完全主義と自己の不完全性認知の関連の検討—不完全な自分を肯定できるか？— 目白大学心理学研究, **5**, 93-106.
- 桜井茂男・大谷佳子（1997）. “自己に求める完全主義”と抑うつ傾向および絶望感との関係 心理学研究, **68**, 179-186.
- 杉浦義典・杉浦知子・丹野義彦（2007）. 日本語版不決断傾向尺度の信頼性と妥当性の検討 人間科学論集, **41**, 79-89.

- 友野隆成・橋本幸（2005a）．改訂版対人場面におけるあいまいさへの非寛容尺度作成の試み パーソナリティ研究, **13**, 220-230.
- 友野隆成・橋本幸（2005b）．抑うつ・素質・ストレス・モデルにおける性差の検討：対人場面におけるあいまいさへの非寛容を認知的脆弱性として 健康心理学研究, **18**, 16-24.
- 辻平治郎（1991）．パーソナリティの5因子説をめぐって 甲南女子大学人間科学年報, **16**, 59-84.
- 和田さゆり（1996）．性格特性用語を用いた Big Five 尺度の作成 心理学研究, **67**, 61-67.
- 吉川茂（1980）．Ambiguity Tolerance の程度と適応性 関西学院大学教育学科研究年報, **6**, 35-39.